

フリーキック

どんより曇ったグラウンドは、市民少年サッカー大会で盛り上がっている。F.C.ライオンズとF.C.ドラゴンズは後半十五分（二十分ハーフ）まで一対一の同点である。

ここで、ライオンズは、誠が相手チームの反則でたおされて、直接フリーキックのチャンスを得た。ライオンズのフリーキックは、いつもキャプテンの実がけていた。しかし、今日の実は、いつもの調子ではなく、直接ゴールをねらったフリーキックを二本はずしていた。実がキックする位置にボールを置くと、ベンチの監督からサインが出た。それは、直接ゴールをねらうのではなく、ゴール前にボールをけり上げて、誠と友之が走り込んでシュートをする作戦のサインである。

しかし、実はず、二本のフリーキックをはずしているだけに、どうしても今度こそは、ゴールを決めたかった。どうしても自分が決勝点をとりたかった。実は、もう一度ベンチを見たが、監督は、きびしい表情で、さつもとと同じサインを出している。

実は、今まで中心となってチームを引っ張ってきた。みんなから信頼されているチーム思いのキャプテンだ。でも、このサインだけは、したがいたくなくなかった。しかし、監督のサインを無視するわけにはいかない。実は、

監督のサインにつなずいた。実は、サイン通りにボールをけるうとして、走り出した。ゴールキーパーの動く足を見た瞬間、実は、シュートしたいという衝動にかられた。

—— 決める！ きつと決めてやる！ ——

決められるならば、わざわざパスをすることはない。

実は、大きくバックスイングをし、ボールをけつた。ボールは、相手のディフェンダーの頭の上をかすめて、大きくカーブし、ゴールの左上ぎりぎりのところに吸い込まれた。ライオンズの応援席からは、大きな歓声があがり、みんな大喜びをしている。結局、実のフリーキックが決勝点となり、この大会での優勝が決まった。実は、一躍ヒーローになった。

次の日、ライオンズの選手たちは、晴れ晴れした気持ちで練習をしていた。

そこへ、監督が姿をあらわした。

「みんな、話があるんだ。よく聞いてくれないか。」

と云って、監督は、話し出した。



「昨日は、みんなよく頑張った。優勝したので県大会に出場できることになった。みんなの努力と頑張りを心から祝福したいが、私には、それができない。」

選手たちは、黙って監督の方を見ている。監督が、これから何か言おうとしていることを、みんな感じていた。

監督は、静かに話し出した。

「私が君たちと、君たちの親から監督になつてほしいと頼まれた時、約束したことを覚えているね。みんなで決めたルールは、必ず守ること。特に、試合のときは、サインがでたら、その作戦を必ず実行すること。みんなもりようかいしてくれた。だから今まで、信頼関係を保ちながらやってくることができた。しかし、昨日、自分勝手な、無責任な行動を目にした・・・。」

ぼくのことかな、と実は思った。でも、決勝ゴールを決めたのだから、と自分に言い聞かせた。

監督は、実に向かつて言った。

「単刀直入に言おう。私は、昨日の実の決勝ゴールが納得できないのだ。実が、ゴール前にボールをけり上げて、誠と友之が走り込んでシュートをする。これがあのときのチームの作戦であつた。実は迷っていたよつだが、つなずいた。しかし、結局、勝手にシュートを打った。明らかにシュート

のけり方だった。実は、私との約束を、いや、そればかりではなく、チームの規則を守らなかつたことになる。サッカーは、集団競技だ。各自の役割を果たしてこそ、チームとしてまとまる。自分勝手にやる無責任な行動は、許されない。」

「でも、決勝ゴールを決めたんですから・・・。」

と、誠が実をかばった。

「違う、どんなに結果がよくても、約束や規則をやぶった無責任な行動に変わりはない。みんな、少年サッカーは、勝ち負けだけを争うものではない。体力や精神力をつけたり、チームワークを身に付けたりするためのものなんだ。」

選手たちは、黙って聞いていた。

「実はいいプレイヤーだ。しかも、キャプテンだ。でも、約束や規則をやぶった者を、そのままにしておくわけにはいかない。実の県大会出場を禁じようと思う。その結果、私たちのチームは、県大会で負けるかもしれない。しかし、それはしょうがないことだ。」

みんなは、思わず監督の顔を見た。実は、涙を流しながら下を向いていた。

